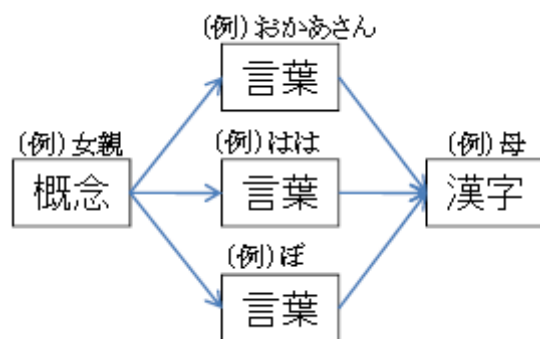


(2) 漢字の音訓整理について

国語改革論者は、「漢字には読み方がいく通りもあるので、どう読んでいいか迷わされる。一つの文字がいく通りにも読めるということは、文字の用法を複雑にして不便であるから、音訓を整理しなければならない」と言います。これはとんでもない誤った考えです。文字が先にあって、読み(実は言葉)がその後からできたものではありません。言葉が先にあって、その言葉を表現するものとして文字が生れたのです。だから、一つの漢字にいく通りもの読みがあるというのは、事実と相違した言い方だと言わなければなりません。事実、漢字を知る知らないに関係なく、「漢字の音訓」と言われている、実は「言葉」があるのであって、その「言葉」が、一つの概念に対していくつも(同義異語)があるので、その複雑な言葉を統一整理する働きをしているのが、実は漢字なのです(右の図式)。つまり「数多くの同義異語を一つの漢字によって兼ねている」というのが事実と合った言い方なのです。



数学では、「 $A=B$ 」は「 $B=A$ 」と書き変えても同じことですが、「私は君と同じ権利を持つ」とい

う表現を、「君は私と同じ権利を持つ」という表現に変えたら、「両者の持つ権利の同等であることを主張する」という事実は相違ありませんが、「主張の精神」はまったく変化してしまいます。前者は自分の権利を主張するものですが、後者は相手の権利を尊重するものです。ですから、「いくつもの言葉を一つの漢字で兼ねている」という言い方と、「一つの漢字にいくつもの読み方がある」という言い方とは、事実としては同じ面があっても、その「主張の精神」はまったく反対になってしまうことに注意しなければなりません。私が、「事実は、いくつもの言葉を一つの漢字で兼ねているのだ」と主張しているのを、「結局、一つの漢字がいく通りにも読めるということになるのではないか」と言われたらいけないのです。

「一つの漢字に、いく通りもの読み方がある」と言えば、聞く者は誰でも、「漢字ってほんとに煩雑な文字だ」と感じます。しかし、「いくつもの言葉を一つの漢字で兼ねているのだ」と言いますと、煩雑なのは言葉であって、漢字はその煩雑な国語を簡易化し能率化しているのだ、ということがよくわかって来ます。

このように、「音訓整理」ということは、認識不足というよりは、事実の認識をまったく誤ったところに起ったものなのです。つまり、漢字制限の問題と同様、言葉の問題を、文字の問題と取り違えているのです。

国語改革論者は、罪は漢字にはなくて、言葉にあるのに、言葉は

そのままにしておいて、ただ漢字の音訓を単一にしようと図っています。だから、切り棄てられた音訓は、**別の文字**によって表記されるだけ、煩雑な言葉は一向に整理されませんから、国語の表記はかえって複雑になるのです。つまり、今まで、一つの漢字によって統一されていた同義異語が、みんな異なった表記を取るようになりますので、表記の数がふえて、それだけ複雑さを増すわけです。

話をわかりやすくするために、「兄」という漢字について、具体的に考えてみましょう。国語改革論者のねらいは、「一字一音」ということですから、例えば「ケイ」だけが残されて、「キョウ」も「あに」も「にい」も切り棄てられるわけです。しかし、切り棄てられてもこれらは言葉としては残されますから、「ケイ」の場合だけ「兄」が用いられ、「父兄」「**きょうだい**」「**あに**」「**おにいさん**」というように表記されることになります。これがほんとに国語の簡易化能率化と言えるでしょうか。国語教育の問題として、「ケイ」「キョウ」「あに」というまったく異なった表記が同じ概念を表すものであることはやはり指導しなければならず、負担は決して軽減しません。表記が分れ複雑になっただけ、機能が低下するという弊害を招くだけです。「フケイ(父兄)」「キョウダイ(兄弟)」「あに」「にいさん」これらの**言葉**を理解している者で、これらの言葉の表記が「兄」であることを知るならば、「父兄」「兄弟」「兄」「兄さん」を読み分けることは**少しも**困難なことではないはずです。理屈だけを言えば、「父

兄」を「フキョウ」と読み誤る可能性はあります。しかし、それは「フケイ」という言葉を知らない場合に起ることで、言葉を知らないものが、文字だけを読めるはずがないではありませんか。言葉を知らなくても「ふけい」という表記なら読める、と言うのですか。言葉を知らなくて「フケイ」とただ発音できたからと言って一体それが何になりますか。おうむの口まねと同じではありませんか。それは、ほんとに「読める」とは言えないものです。それに比べたら「父兄」を「フキョウ」と読み誤った方がましだと思いませんか。意味だけは誤りなく汲み取れるはずですから。そして目的は意味を取ることにあるのですから。つまり、「兄」という字の持つ概念を知れば、「**フケイ**」「**キョウダイ**」「**あに**」「**にいさん**」という言葉の一つも知らなくても、つまり、「父**兄**」「**兄弟**」「**兄**」「**兄さん**」が読めなくても、すべて**理解できる**のです。そして、「ケイ」「キョウ」「あに」「にいさん」という表記では、その言葉を知らないかぎり、ただ発音できるというだけで、**真に読むこと**はできないのです。

英国や米国では、「A」という表記を、ある時は「Answer」と読み、ある時は、「Academy」と読みます。また、「America」「Army」「April」「Alto」「Adjective」「Acre」とも読みます。これは、これらの言葉を知らない人には、**絶対に**読めませんが、読める人には、この方が**能率的に**読めるのです。例えば、「Wise(a.)」は、「wise(adjective)」より、能率的なのです。イギリス人やアメリカ人は『A』がいくつにも読めたので

は、どう読んでいいかわからないので、一つだけにしよう」などとは決して言いません。「A」の場合は、「April」や「America」の間に何のつながりもないだけに、読めない場合は、もう処置なしです。それに比べたら、「兄」の場合は、皆同義語ですから、たとえ読めなくても、目的である意味だけは汲み取れるのですから、「A」の用法より、はるかにすぐれています。

それでも、「A」はいいが、「兄」がいく通りにも読めるのは困る、とおっしゃいますか。もしそうだとおっしゃるのでしたら、ぜひその理由を聞かせていただきたいと思います。

くり返して言いますが、「一つの漢字は、いくつもの音訓があるのは不便だ」と言うのは真実ではありません。頭の中で作り上げた理屈です。それもきわめて単純な頭で……。しかし、もし不便だと言うなら、それは漢字の方ではなくて言葉の方が煩雑なのですから、漢字の音訓を整理すべきではなくて、言葉を整理すべきです。前頁の図式のように、**一つの概念**を表わす言葉に、**いくつもの言葉**があるのであって、漢字はこれらの煩雑な言葉を統一する働きをしていて、**一つの漢字**で表記しているのです。一つの概念に対して一つの表記ですから、漢字は少しも煩雑ではありません。漢字は今までとんでもない「ぬれぎぬ」を着ていたわけです。

実は、この私の見解は、本年(昭和36年)3月下旬、朝日新聞の学

芸欄で、「漢字とカナ」の第三人目として私が執筆した時に、倉石武四郎氏(第二人目)の「音訓整理」の反論として、「音訓の問題については、私は、倉石先生と見解を異にする」という書き出しですでに発表したものです。以後未だに、私の見解に対する反論を聞きませんが、これはぜひ論じあって、はっきりと黒白をつけるべき問題だと思います。実は、4月17日、朝日新聞「声」の欄に「3月下旬、『漢字とカナ』で、私は『複雑だという非難を受けて制限された漢字の音訓整理が、実はかえって国語生活を複雑にし、混乱させるものである』ことを、理論と実際の両面から指摘して、審議会の非を責めたつもりである。しかし、いまだにその返答を聞かない。私の見解に誤りがあるなら、遠慮なくそれを指摘していただきたい。私は自分の考えが誤っているとわかれば、喜んで審議会の意見に従うつもりでいる。おたがいに、納得いくまで率直に誤りを指摘しあい、反省しあってこそ、真理が発見されるのだと思う」と私は書いたのです。審議会の返答をお待ちしています。